

日本古代史研究とシミュレーション

先史・古代史グループ 今津 勝紀 (岡山大学大学院社会文化科学研究科)

ここ15年ほどの研究の軸足は、古代社会論と倭王権^{やまと}の形成過程の地域史的研究にある。前者は、東アジアの辺境に位置する列島社会の基礎構造を考えるもので、これまで理念的に措定されていた古代社会論の克服を目的とする。後者も日本の古代史研究では列島中央部の制度史的考察が中心にならざるをえなかったのだが、これを地域に即して復原しようとするものである。いずれも自分のなかでは通ずるところがあって、実態に即して対象をリアルに捉まえたいという好奇心に支えられている。

伝統的な日本古代史研究の実証方法では、実態に手の届かない場合があるのは事実だが、実証や把握には多様なレベルがある。極端な例では、1と1を足したら2であるが、1と1を足したなら正の数になりそうだ、という情報に興味のある場合も考えられるだろう。現代の医療などは疫学により支えられているが、疫学の基礎は統計学にほかならない。厳密な意味での病気発生の機序や薬理のわからないものも多いが、現代医療はそれなりの水準で機能している。日本古代史では統計に適した史料がほとんどないため、統計学の応用はまったく進んでいないが、史料から確実に導けるところを基礎にして、シミュレートすることは可能である。そのため、地理情報システムや人口動態シミュレーションなどの邪道な方法も使いながら、さまざまな冒険をしている。

これまで、大宝2(702)年の^{みののくにかもぐんはにゅうり}御野国加毛郡半布里戸籍のデータをもとに、計算機上に人工的に社会をつくり出し、古代の出生時平均余命のデータや推定出産率などのデータをもとに、シミュレーションの手法を利用して人口動態を再現し、当時の婚姻や出産のあり方、さらには古代「家族」の復原を試みた。この人口構成を維持すると仮定した場合、出生率は1925年の日本と同等か少し上を示すと考えられるが、死亡率は現在と2桁違いの高率となり、出生時の平均余命は30歳程度であった。それでも奈良時代のはじめと比較して平安時代の初頭で人口が1割ほど増加

したとの推定があり、奈良時代の年平均人口増加率は平安時代から江戸時代初頭までの年平均人口増加率の2倍となる。そして、当時の人口分布は列島中央部から西部に中心があり(図参照)、そうした地域の人口圧が前提となって、蝦夷^{えみし}が居住する東北への植民、隼人^{はやと}が居住する南九州への植民が行なわれた。おそらく口分田の開発・班給・出挙などの律令制再生産システムが、それなりに意味をもったであろうことが考えられるが、これらはいずれも社会と環境との応答関係に規定されたものである。その応答関係の焦点が気象にほかならない。本プロジェクトで取り組んでみたいのは、まさにこの点である。

日本の律令制は幻にすぎず、まったく機能していないと考える説が有力である。日本古代史研究の常識的な分析方法は、史料の性格をふまえて論証できる範囲を厳格に考えるので、とすれば歴史のなかの実態なぞ捉えることができない、現代の視点からの解釈のみが歴史の事実であるなどと、優秀な古代史研究者は考えるのかもしれないが、生来愚鈍な私は、こうした考え方にどうにもなじめない。私たちが今ここに生きていることは厳然とした事実であり、古代において人の営みがあったことも、また然りである。それを理解しようとする試みに背を向けるべきではないだろう。歴史学は事実と誠実に向き合う学問であるべきだ。

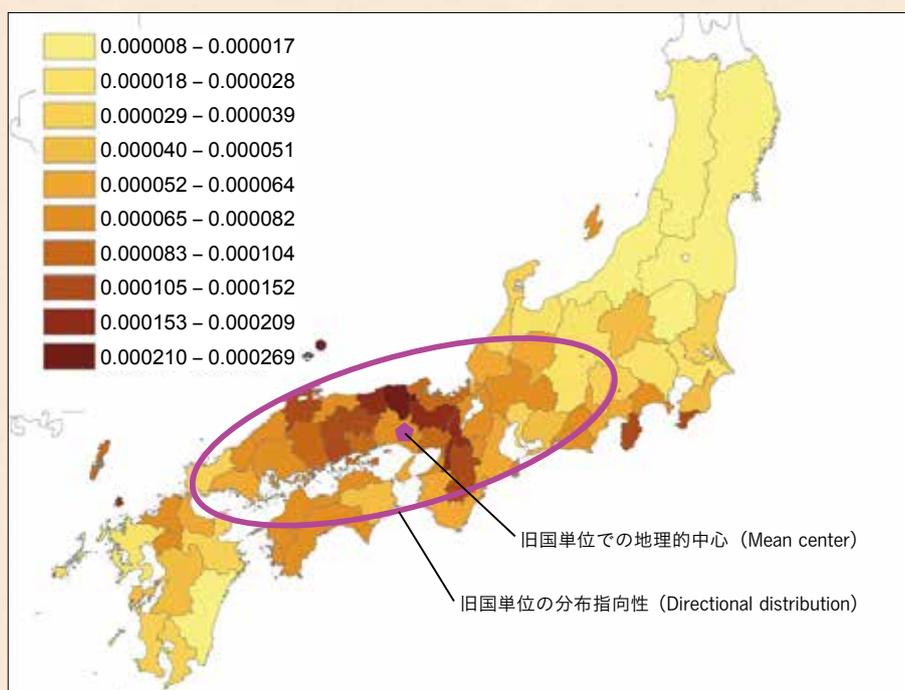


図 旧国別郷密度 (平地)